国産マッチ 絶やさぬ火

来春最大手撤退、国内3社に

かつて身近な存在だったマッチは、ライターの普及もあって姿を消しつつある。家庭用マッチの最大手は来年3月に生産をやめて、淡路島の工場を閉める予定だ。国内に残る大手メーカーは3社だけになる。東日本大震災をきっかけに防災用品として再評価されているだけに、各社とも「国産の灯（ともしび）」を保とうとしている。

兼松サステック淡路工場のマッチ製造機と前川和範工場長＝兵庫県淡路市

機械故障 提携で助け合い

「カシャーン、カシャーン」。家庭用最大手の兼松サステック（旧兼松日産農林）の淡路工場（兵庫県淡路市）には毎日、リズミカルな機械音が響く。従業員17人が、マッチ箱の材料の厚紙を機械にセットしたり、不良品がないかチェックしたりする。

工場ができたのは1905年。箱に桃や麦、ツバメなどの絵をあしらったマッチを全国のスーパーや100円ショップに出荷してきた。家庭用ではシェア4割で国内首位だ。1日の生産量は約400万本と、ピークだった70年代の7分の1程度にとどまる。使い捨てライターなどが普及したためだ。ここ20年は兼松のマッチ事業はほぼ赤字。国内に10工場以上あったが、40年前から淡路だけとなっていた。

その工場も来年3月末に閉鎖する。決め手となったのは機械の故障だった。無数の穴が開いた金属板に細長い木の棒（軸木）を自動で差し込む工程で、1年ほど前から穴にうまくささらなくなった。部品が摩耗し、棒を押し込む位置がわずかにずれるのが原因だった。機械は70年製で、工場長の前川和範さん（47）は「一つ直してもすぐに別のところが悪くなる」という。

製造元は40年ほど前に機械の生産を終えており、不具合があっても部品の自作などでしのぐしかない。いったん生産は開いたが動作は安定しなかった。商標は、同業の日東社（兵庫県姫路市）が引き継ぐ。従業員には社内での再配置や再就職の支援をするという。

兼松が撤退すると国内でマッチを一貫生産するのは、日東社、大和産業（姫路市）、中外擦寸社（岡山市）になる。3社の機械も40～50年前に導入したもので、同じ課題を抱える。

日東社の大西千尋会長（81）は「国産マッチの火を消したくない」。10月に入り大和産業と提携を結び、機械に不具合が出た時に助け合うことにしたという。

国内のマッチ生産量は震災を機に下げ止まっている

旧兼松日産農林のマッチ

日本のマッチ産業
日本燐寸（マッチ）工業会によると、国産マッチは1875年に東京で生産が始まった。その後、温暖で雨が少なく、輸出に便利な神戸港を抱える兵庫県に工場が集まった。いまも約9割が兵庫県でつくられている。明治、大正期はスウェーデンや米国と並ぶ生産国だった。

安さ、魅力の一つ■ライターはレバー固い

大震災後 注文↗

日本燐寸工業会（神戸市）によると、ピーク時の1973年には国内で約79万3千マッチトン（1マッチトン＝30万～40万本相当）が生産されていた。2015年には約60分の1の約1万3千マッチトンまで減っている。

再評価の動きもある。12年の生産量は前年の約1割増と39年ぶりに増加に転じた。その後は微減となっている。工業会が09年に防災用に発売したうそく入りの「缶詰マッチ」（税込み540円）は、11年の東日本大震災後に自治体や企業からの注文が急増した。13年の販売量は約2万5千缶と、震災前の10年と比べ約10倍に増えた。15年度から備蓄し始めた愛知県蟹江町の担当者は「ライターはガスが抜けるため、長期保存に向いていない。マッチは安いのも魅力だ」と話す。

ライバルの使い捨てライターについて、国が10年に安全規制を強化したことも影響している。子どもの事故防止のため、点火レバーが固くなった。一部のお年寄りらがマッチに戻ってきた。姫路信用金庫は13年、20～30年ぶりにマッチを商品にし、好評だったという。「喫茶店などでもらう機会が減ったため、マッチを好む人から喜ばれたようだ」（同信金）とみる。

神戸市のマッチ業者「ナカムラ」は、レトロ調のラベルの缶入りなどユニークな商品を開発し、百貨店やインターネットで販売している。高くても若者らに人気があるという。中村和弘社長（52）は「マッチで火をつける行為は一つの文化でもあり、簡単にはなくならないだろう」と話す。（新田哲史）

災害時の備蓄用として評価されている缶詰マッチ＝神戸市

2016年（平成28年）
11月28日
月曜日
夕刊 関西発
あすは何の日
大韓航空機爆破事件（1987年）
朝日新聞大阪本社
〒530-8211 大阪市北区中之島2-3-18
電話 06-6231-0131 www.asahi.com